

ごんぎつね

新美 南吉
にいみ なんきち

一

これは、わたしが小さいときに、村の茂平^{もへい}というおじいさんから聞いたお話です。

昔は、わたしたちの村の近くの、中山^{なかやま}という所に小さなお城^{しろ}があつて、中山様^とというお殿様が、おられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごんぎつね」というきつねがいました。ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっぱいしげった森の中に穴^{あな}をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入っていもをほり散らしたり、菜種^{なな}がらの、干し^ほであるのへ火をつけたり、百姓^{ひやくしやう}家の裏手^{うらで}につるしてあるとん

がらしをむしり取っていったり、いろんなことをしました。

ある秋のことでした。二、三日雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られなくて穴^{あな}の中にしゃがんでいました。

雨が上がると、ごんは、ほっとして穴からはい出ました。空はからつと晴れていて、もずの声がキンキン、ひびいていました。

ごんは、村の小川の堤^{つみ}まで出てきました。辺りの、すすきの穂^ほには、まだ雨のしずくが光っていました。川はいつも水が少ないのですが、三日もの雨で、水が、どつとましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、はぎの株^{かぶ}が、黄色くにこった水に横だおしになって、もまれていきます。ごんは川下の方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは見つからないように、そうつと草の深い所へ歩きよって、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十^{ひやうじゅう}だな。」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒い着物をまくし上げて、腰^{こし}の所まで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、綱^{あみ}をゆすぶっていました。はちまきをした顔の横つちように、円いのはぎの葉が一まい、大きな黒子^{ほくろ}み

いにへばり付いていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり、網のいちばん後ろの、袋のようになったところを、水の中から持ち上げました。その中には、しばの根や、草の葉や、くさった木切れなどが、ごちやごちや入っていましたが、でもところどころ、白い物がきらきら光っています。それは、太いうなぎの腹や、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみといっしょにぶちこみました。そしてまた、袋の口をしばって、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくを持って川から上がり、びくを土手に置いて、何をさがしにか、川上の方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中から飛び出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなったのです。ごんは、びくの中の魚をつかみ出しては、はりきり、網のかかっている所より下手の川の中を目掛けて、ぽんぽん投げこみました。どの魚も、「トボン」と音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。

いちばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、なにしろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれったくなって、頭をびくの中につっこんで、うなぎ

の頭を口にくわえました。うなぎは、キュツといって、ごんの首へまき付きました。そのとたんに兵十が、向こうから、

「うわア、ぬすどぎつねめ。」と、どなりたてました。ごんは、びっくりして飛び上がりました。うなぎをふりすててにげようとしたが、うなぎは、ごんの首にまき付いたままはなれません。ごんはそのまま横っ飛びに飛び出して一生けんめいに、にげていきました。

洞穴の近くの、はんの木の下でふり返ってみました。兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっと外して、穴の外の草の葉の上にのせておきました。

二

十日ほどたって、ごんが、弥助というお百姓のうちの裏を通りかかりますと、その、いちじくの木のかげで、弥助の家内が、お齒黒を付けていました。かじ屋の新兵衛のうちの裏を通ると、新兵衛の家内が、髪をすいていました。ごんは、

「ふふん、村に何かあるんだな。」と思いました。

「なんだろう、秋祭りかな。祭りなら、たいこや笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが。」

こんなことを考えながらやってきますと、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十のうちの前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢の人が集まっていました。よそ行きの着物を着て、腰に手ぬぐいを下げたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きななべの中では、何かぐずぐずにえていました。

「ああ、葬式だ。」と、ごんは思いました。

「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」

お昼がすぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六地藏さんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向こうにはお城の屋根がわらが光っています。墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いていました。と、村の方から、カーン、カーンとかねが鳴ってきました。葬式の出る合図です。

やがて、白い着物を着た葬列の者たちがやってくるのがちら

ちら見え始めました。話し声も近くなりました。葬列は墓地へ入ってきました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみ折られていました。

ごんはのび上がって見ました。兵十が、白いかみしもを着けて、位はいをささげています。いつもは赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が、今日はなんだかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおつかあだ。」

ごんはそう思いながら、頭を引っこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおつかあは、床についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきり網を持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから兵十は、おつかあにうなぎを食べさせることができなかった。そのままおつかあは、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら、死んだんだろう。ちよつ、あんないたずらをしなけりやよ

かった。」

三

兵十が、赤い井戸の所で、麦をといでいました。

兵十は今まで、おつかあと二人きりで貧しい暮らしをしていたもので、おつかあが死んでしまつては、もうひとりぼっちでした。

「おれと同じひとりぼっちの兵十か。」

こちらの物置の後ろから見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしの安売りだアイ。生きのいい、いわしだアイ。」

ごんは、その、いせいのいい声のする方へ走っていきましたと、弥助のおかみさんが裏戸口から、

「いわしをおくれ。」と言いました。いわし売りは、いわしの

かごを積んだ車を、道ばたに置いて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中へ持って入りました。ごんはそのすき間に、かごの中から、五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十のうちの裏口から、うちの中へいわしを投げこんで、穴へ向かつてかけもどりました。とちゅうの坂の上でふり返ってみますと、兵十がまだ、井戸の所で麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

次の日には、ごんは山で栗をどっさり拾って、それをかかえて、兵十のうちへ行きました。裏口からのぞいてみますと、兵十は、昼飯を食にかけて、茶わんを持ったまま、ぼんやりと考えこんでいました。変なことには兵十のほつぺたに、かすり傷が付いています。どうしたんだろうと、ごんが思っていますと、兵十がひとり言を言いました。

「いったいだれが、いわしなんかを、おれのうちへほうりこんでいったんだろう。おかげでおれは、盗人と思われて、いわし

屋のやつに、ひどい目にあわされた。」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷まで付けられたのか。

ごんはこう思いながら、そつと物置の方へ回ってその入口に、栗を置いて帰りました。

次の日も、その次の日もごんは、栗を拾っては、兵十のうへへ持ってきてやりました。その次の日には、栗ばかりでなく、松だけでも二、三本持っていきました。

四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。中山様のお城の下を通って少し行くと、細い道の向こうから、だれか来るようです。話し声が聞こえます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片側^{かたがわ}にかくれて、じっとしていました。話し声はだんだん近くなりました。それは、兵十と、加助^{かすけ}というお百姓でした。

「そうそう、なあ加助。」と、兵十が言いました。

「ああん。」

「おれあ、このごろ、とても、不思議なことがあるんだ。」

「何が？」

「おつかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれに栗や松たけなんかを、毎日毎日くれるんだよ。」

「ふうん、だれが？」

「それが分からんのだよ。おれの知らんうちに、置いていくんだ。」

ごんは、二人の後をつけていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。その栗を見せてやるよ。」

「へえ、変なこともあるもんだなア。」

それなり、二人はだまって歩いていきました。

加助がひよいと後ろを見ました。ごんはびくつとして、小さくなって立ち止まりました。加助は、ごんには気がつかないで、そのままさっさと歩きました。吉兵衛きちべゑというお百姓のうちまで来ると、二人はそこへ入っていきました。ポンポンポンと木魚の音がしています。窓の障子まどしに明かりが差していて、大きなぼうず頭がうつつて動いていました。ごんは、

「お念仏ねんぶつがあるんだな。」と思いながら井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど、人が連れ立って吉兵衛のうちへ入っていきました。お経おきやうを読む声が聞こえてきました。

五

ごんは、お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、またいっしょに帰っていきます。ごんは、

二人の話を聞こうと思って、ついていきました。兵十の影法師かげぼしをふみふみ行きました。

お城の前まで来たとき、加助が言いだしました。

「さっきの話は、きつと、そりゃあ、神様のしわざだぞ。」

「えっ？」と、兵十はびくくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神様だ、神様が、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしやって、いろんな物をめぐんでくださるんだよ。」

「そうかなあ。」

「そうだとも。だから、毎日神様にお礼を言うがいいよ。」

「うん。」

ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。おれが、栗や松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじゃアおれは、引き合わないなあ。

六

そのあくる日もごんは、栗を持って、兵十のうちへ出かけました。兵十は、物置で縄をなっていました。それでごんはうちの裏口から、こっそり中へ入りました。

そのとき兵十は、ふと顔を上げました。と、きつねがうちの中へ入ったではありませんか。こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十は、立ち上がって、納屋^{なや}にかけてある火縄銃^{ひなわじゅう}を取って、火薬をつめました。

そして足音をしのばせて近寄^{ちかよ}って、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、バタリとたおれました。兵十はかけよってきました。うちの中を見ると土間に栗が、固めて置いてあるのが目につきました。

「おや。」と兵十は、びっくりしてごんに目を落としました。

「ごん、お前^{まへ}だったのか。いつも栗をくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。兵十は、火縄銃をバタリと、取り落としました。青いけむりが、まだ筒口^{つつぐち}から細く出ていました。

「ごんぎつね」

※『赤い鳥』版（鈴木三重吉主宰、1931年1月号）の「ごん狐」をもとに現代仮名遣いで表記しました。漢字については小学4年生までの学習漢字を基本とし、学習していない漢字には初出にルビをうちました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。（TEL：0569-26-4888）